



猫

談

短編  
小説

やうみよいち  
八海宵一

一

木出はくたばっていた。

長く伸びた手足をせまい部屋にぶつけ、黒く底のない瞳は天井を見たままだった。天井には大きな蜘蛛が巣をはっていたが、木出がそれをみているのかどうかは、わからなかった。涼しげな顔立ちには筋肉の緊張がまるでなく、まぶたも自然にまかせるだけ開き、光をそっと取り入れている。

てらてらとしている日向には、蝉と物売りの声が鳴り響き、隣の共同台所から、猫のなき声が幽かに聞こえてくる。

がらんどうに近い木出の部屋は、ことのほか蝉と物売りの声が反響して、うるさくて仕方がなかった。しかし、どういうわけか、猫の声だけは交じり合うことなく、木出の耳元で、途切れることなく鳴き続けていた。

幻聴の類かもしれない。ちゃんと飯を食べていれば、こんなこともないのだろう。

三月ほど親元からの仕送りが途絶え、からっぽの米櫃のなかでは、虫さえが生意気に餓死している。

木出はくたばっていた。

仕方がないから、くたばっていた。

ただ、猫の声だけが、いつまでも鳴いている。

二

木出はゆっくりと起き上がり、けだるい体をかきながら、欠伸をした。

陽はずいぶんと傾き、うるさかった蝉の声はいつのまにか哀しい蝸になっている。うるさかった物売りは、いまごろ家で夕飯を食いながら、うるさく子供を叱っている頃だろう。

部屋に西日が入りこみ、木出は目を細めた。

汗ばんだ体をなんとか手で拭い、埒が明かぬので行李から手ぬぐいを取り出した。

今日も、あと寝るだけである。

木出は部屋のすみにたたんである夜具を、そのまま、ずるずると引きのばして、部屋をでた。さすがに、そのまま寝るのはつまらない、とひとりで呟いた。

木出の部屋は下宿屋の一階の端で、むかいが共同の台所になっていた。もともと部屋数の多い屋敷だったのを、大した改造もせず貸し出しているのだから、各部屋に台所はつけられていなかった。それはまだいい。問題なのは風呂のほうで、これも唯一の風呂釜が壊れてからは、修理をするような気配もなく、結局、銭湯へ通わなければいけなくなった。金があるときは、それでもいいが、大変なのは、金がないときで、そういうときは、台所の井戸で行水をするぐらいしか、ほかに手がない。

木出は台所にいき、ポンプ式の井戸から水を汲みあげ、桶にあけると、手ぬぐいを濡らし、顔をぬぐった。

水は小気味よく冷え、汗ばんだ体に気持ちよかった。そのまま、首筋、胸、うでから足へと、手ぬぐいを動かし、水遊びのような行水を楽しんだ。

それをじっと、猫が見ていた。

丸々と太った三毛猫で、艶のある毛を寝かせたまま、ときおり、目を糸のように細めてみせた。流しのへりに、でん、と陣取り、飛沫がかかるたび、耳をぴくぴくさせている。ふつうなら嫌がって、どこかへ行きそうなものなのに、よほどその場所が気に入っているのだろうか、動こうとしない。老猫なので、ただ億劫なのかもしれなかった。

野良猫ではあるけれど、この下宿屋に居つき、いつのまにか、「ふく」と呼ばれていた。

「ふく」はたいてい、丸々とした体勢で、気持ちよさそうに眠っていた。

木出は体をぬぐいながら、「ふく」をしげしげと眺め、しばらくしてから、「ふうん」と、呟いた。

### 三

「やあ、くたばってますね」

行水を終えた木出は、眠気がうせたので、隣室の水沢に声をかけた。同じ学校のひとつ先輩で、暇になると、木出はよく、水沢と雑談をして、時間をつぶすのが常だった。学科も専攻もたまたま同じで、よく洋書のことで話しこんだ。

木出は、ちょっとした魂胆を胸の裡に秘めながら、いつものように、鴨居に手をかけ、伸びをするような格好で遊びながら、水沢を眺めた。

先刻の木出のように、大きな手足を壁にぶつけたまま、水沢は大の字になっていた。

面倒臭そうに右手をあげて、水沢が応える。

「そりゃあ、君。たしかに米櫃にゃあ、空気がたくさん詰まってますがね。でも、くたばってたんじゃない。今まで本を読んでいてね、で、ちょっと、疲れたもんだから、脳と目を休ませているんです」

「はあ。それはそれは」

木出はわざとらしく、おどけた顔で言った。

「ぼくはまた、仕送りが届かずに、朝飯のぶんの力を節約してるのかと思いましたよ」

それを聞いて、水沢は半身を起こし、頭をふった。

「木出くん」

「はい」

「わかっている聞く奴のことをなんていうか知っているかい？ 野暮天というのだよ」

「なるほど……それは勉強になりますね」

教示を賜った木出は笑いながら、頭をさげるマネをした。

水沢が、それを見て懐から蓑をとりだしながら、苦笑する。

「それで、一体なんのようだい？ まさか、からかいに来ただけでもないだろう？ 互いに徒な力は使いたくない、身の上だよ」

三白眼で水沢が促すと、木出は少しはにかみ、濡れた前髪を撫でるようにかきあげた。

「あんまり、退屈なんで、雑談でもしようかと思ったんですが……腹が減りますよねえ」

「うん、減るね」

水沢は紫煙を吐きながら、うなずいた。

二人とも、三日ほど、ロクなものを食べていなかったから、雑談するだけの力があるのかさえ、わからなかった。声を出しているだけでも、すきっ腹にはこたえ、頭のうちはどこか、ぼんやりとしている。

それなら、よせばいいのにと思うのだが、どういうわけかあきらめない。

「でも、ぼくは雑談がしたいんです」と、木出が言った。

「すればいいじゃないか、ひとりでしたまえよ」

「ひとりで？」

木出が首を傾げる。「できませんよ、そんなの」

「いや、そんなことはない。なにかしら好きなことを、きみがひとりで話せばいい。そうしたら、適当に相槌くらいは打ってあげるから。さあ、やりたまえ」

「さあ、と言われましてもねえ。それじゃあ、話にもなんにもなりやしませんよ。独り言じゃありませんか」

「しかし、話というのは、たいていそんなものだよ」

水沢は莧を一本呑み終え、また、ごろりと横になった。

木出はしばらくそんな水沢を見ていたが、やがて、窓の外を眺め、乾きかけの頭をかいた。おもてはもう随分暮れていて、藍と墨を溶かしこんだような夕闇が、やってきている。

木出はすこし間をあけて、また話しはじめた。

「たしかに、それも話の形態かもしれませんが……でも、水沢さん、ぼくは鍋をつつきながら、雑談がしたいんです」

「それなら、私だってしたいね。この蒸し暑い日に鍋というのも、あれだけど、汗をかいて、ふうふうやるのもなかなか乙なものだからね」

水沢は横になったまま、体をねじらせ、木出でのほうに寝返りを打った。

すると、木出は我が意を得たりとばかりに、顔をほころばせ、膝をぴしゃり、と打った。

「それなら、鍋とか貸してくれませんか？ ぼくはこのあいだ、庖丁やら、俎板やら、それこそ、鍋やらガスコンロやらと、自炊一式を質に入れてしまったのですよ」

ここの下宿屋は、飯炊きがひとりもないから、各自が共同の台所を使って飯の用意をしていた。昔はこの屋の主人の奥さんが用意をしてくれていたらしいが、いまは患って寝たきりの毎日で、それはかなわなかった。一時は炊事道具を自由に使ってよかった時期もあったが、去年の夏、暑さにやられた書生が庖丁をふりまわして以来、各自で揃えるようになってしまった。

「どうして質草なんかに？ ……流さないあてでもあったのかい？」

「そんなものはありませんが、どうしても読みたい洋書があったものですから、それで、つい…

...これでも古書街で揃えたんですがね」

木出はこういうとき、本当にうれしそうな顔をする。水沢も、木出のそんな顔が嫌いでないから、いつも洋書の話にずるずると引きこまれる。

「.....このあいだ知人が、邦訳をやりましてね。その原書を買ったんですが、これがなかなか面白いんですよ」

「待ちたまえ。鍋の話が置いたままになってるよ」

いつもなら、そのまま話しこんでしまうところだが、今日だけは、空腹のほうが勝っている。雑談なら、鍋をはさんで、できるじゃないか、といわんばかりの口調と意気込みが水沢から漂っている。

木出は話しかけたばかりだったので、少し顔をしかめたが、なるほど、鍋のことは自分が言い出したのだから、と気持ちをあらため、話を戻した。

「そう、鍋でした。実はうまい具合なんですよ」

「うまい具合？」

いつの間にか半身を起こしていた水沢は、菘をくわえながら、木出の言葉をくりかえした。

「台所に猫がいるでしょう？」

「うん、いるね」

「あれを食いましょう」

「.....あれって、君、ありゃ猫ですよ？」

「いけませんか？」

「そりゃ、猫はねえ.....」

水沢が渋っていると、木出は首を傾げた。

「嫌ですか？ でも、犬は食うじゃないですか。赤犬とって」

「犬？ .....君は、犬も食うのかい？」

「いや、ぼくの親父が昔食ったきりですがね」

「ふうん.....でも、猫はねえ。猫は薄気味が悪いねえ」

水沢は気乗りしないしない口調で頭を振り、胡坐を組んだ。

「どうしてですか？」

「どうしてって、化け猫、猫又.....とにかく猫は恨む生き物じゃないか」

「ううん」

木出は唸ったまま、しばらく考えこんだ。

「どうして、猫は恨むのでしょうか？」

「知りませんよ、そんなこと」

木出の真顔で訊ねるバカバカしい質問に、水沢は語気を強めた。幼稚なことを聞くのではないよ、と顔に書いてある。

しかし、木出は質問を止めなかった。

「食べて恨まれるのなら、このあいだ、猫の頭を齧っていた道端の野良犬もまた、恨まれるものなんですかねえ？」

「おそらくは、そうですねよ」

水沢は考えもせずに、応えた。

「じゃあ、餓死した猫は誰を恨むんです？ 餓死させるような、世間様ですか？」

「.....なあ、木出くん。ふざけていると、それだけで崇られるよ」

「でも、水沢さん。猫ってのは、きちんと恨むことができるものなんですかねえ？ 存外、しそんじているってことも.....畜生ですからね」

言って、木出が何うような目つきで水沢の顔を見た。水沢は呆れたようすで、手をふった。

「駄目だ、駄目だ。そんなふうに誘っても、猫なんて食べないよ。気味が悪い.....さあ、もう用がないのなら、部屋に戻ってくれたまえ。さ、さ」

水沢が立ち上がって追い立てたので、木出は仕方なく、それに応じた。

木出は今日も飯にありつくことができなかった。

西日にさらされた、すこし温かい夜具にありついただけである。

#### 四

幾日かして、木出はまた、水沢の部屋を訪れた。

「やあ、くたばって.....ませんね。あれ？」

木出が声をかけると、文机で本を読んでいた水沢がふりむいた。

「やあ、木出くん」

「どうしたんですか？」

「なにがだい？」

水沢は本に葉をはさみこんで、むきなおった。

「いつも、飲まず食わずで、くたばっている水沢さんが読書だなんて.....さては、仕送りが届きましたね？ だったら、奢ってくださいよ。ぼくのほうはまだ届かないんですよ」

たしかに水沢の顔色は、甕れた木出より、血色がいいように見える。しかし、水沢は否定した。

「いいや、来やしないよ」

「じゃあ.....とうとう、しでかしましたか」

「なんだい、そのとうとうってのは、人間きの悪い。まるで日頃から悪事を働いてもおかしくないような、言いかたじゃないか」

「ちがうんですか？」

木出が不思議そうに、首を傾げる。

「木出くん、そういう冗談はよしなさい.....それより、今日は一体、なんのようだい？」

水沢は文机の上に放りだしていた蓑をくわえ、灰皿を近くにひきよせた。

すると、それが合図であるかのように、木出が部屋へと入りこんだ。

「そう、それです。実はおもしろいことがありますてね、それを話に来たんです」

「おもしろい話？」

「ええ、このあいだ、猫の話をしましたよね」

「……また、猫の話かい？」

水沢は露骨に、うんざりした表情をした。

「まあ、聞いてくださいよ。不思議なものを見たのですから」

木出はあたりを窺いながら部屋の襖戸を、そっと閉めた。

水沢の正面に座り、伏し目がちに呟く。

「実は、あの話をした翌日に……にゃあにゃあ、と台所から、あの猫の声が聞こえてきましてね」

「あの猫って……「ふく」の？」

水沢は怪訝そうに眉をひそめた。

「ええ、それが老猫のくせに、さかりがついたように、にゃあにゃあと喚きましてね。部屋で寝ていても、うるさくて仕方がないんです」

「ふうん」

水沢は窓の外を見やりながら、ぼんやりと生返事を返すだけだったが、木出はかまわずに、話を続けた。

「あんまり鳴くものですから、頭に来ましてね、外に追い出してやろうと、台所に行ったんですが……猫がいないんです」

「いない？」

「ええ、声はたしかにしている、にゃあにゃあ、とうるさい。でも、それなのに、どこにも姿が見当たらないのです。不思議に思って、声の出所をよくよく調べると、流しの配水管の奥から聞こえているようなんです。でも、どう考えても、猫が入れるような大きさはない。変だな、と思って排水口を覗きこんでも、そこは闇。なんにも見えない。見る目を交互にかえても、同じなんです。こちら執念で、意地になって見ていると、あの猫と目が合ったんです」

「目が合った……配水管に嵌っていたのかい？」

「よくわかりません。覗きこんだ排水口は、真っ暗闇でなんにも見えないはずなのに、あの猫に見られているような気がしたんです」

「なんだか、わからない話だね」

水沢は木出の言っていることを理解しかねた。相手の猫が見えないのに、どうしてそんなことが、わかるのだろう。そのへんは木出も判然としていないらしい、もどかしそうに言葉を探しながら、話を続けた。

「うまくは言えませんが、でも、そういう気配を感じるんです。不気味な視線と寒気を感じながら、ふと顔をあげると、目の前にあの猫が座っていました」

水沢は一本目の莖を呑み終え、黙って二本目に火をつけた。

「声は相変わらず排水口から聞こえているのに、その猫と目が合いました。のどを鳴らしたまま、こちらから目を離そうとしません。ぼくも目をそらしませんでした。いや、そらせなかったというほうが正しいでしょう。なんだか体が金縛りにあったように、動かないんです。あの猫は、そのことに気づくと、顔を腐らせていきました」

「腐らせるって、どうやって？」

水沢が聞き返した。

ふたりともびっしょりと汗をかいていた。どちらも拭うことを忘れ、顎の先から、ポトポトと垂らしていた。

その蒸し暑い空気の中で、木出は頭をふった。

「説明なんてつきません……最初は体に似合わない小さな仔猫の顔でこちらを見ていました。それが徐々に膨らんでいって、だんだん体と釣り合いが取れてくると、今度は顔の毛がバサバサと抜け落ちて、皮と毛がまだらになりました。しかし、首から下はなんともないようで、いや、むしろ毛並みに光沢があるんです。腹は呼吸による上下動を繰り返していました。そのあいだも毛は抜け落ちていて、終いには、顔中の毛穴から毛が噴出すような勢いで、皮も肉も、そぎ落ちていきました。耳すら足場をなくし、ぺたりと音を立てて落ちていきました。それは流れ行く血肉の滝といった感じです……それでも、ぼくはまだ、猫を眺めていました。耳が削げ落ち、猫とも思えぬ異形でも、その眼は骨の宙……ただなかにぼんやりと浮かんでいたからです……それを見て、ぼくはなぜか安堵していました。しかし、それは刹那のうちに崩されました。あの猫が、後ろ肢で耳を掻くような仕草をし、頭蓋骨を蹴飛ばしたんです。骨はゴロゴロと転がりました。ぼくは、あの眼を見失い、首の隙間からあふれる血肉の塊が、排水口に流れていくのを眺めていました……にゃあ、という声が聞こえるまで、ぼくはずっとそうしていました」

木出はそこで話を区切った。

部屋は物音ひとつしなかった。

「ね、おもしろい話でしょう？ おもしろくありませんか」

聞かれた水沢は、ぼんやりと文机に肘をついて黙っていたが、やがて、応えた。

「いいえ、おもしろい話です。不思議な話です。なにより驚きなのは、あの猫に、そんな霊力があつたってことですが……しかし、あの猫は一体、なにがしたくてそんなことをしたんでしょう？」

「たぶん、このあいだの仕返しだと思います」

「仕返し？」

「このあいだ鍋にして食おうと言ったのを、聞いていたんだと思います。猫というのは、水沢さんの言うとおりに恨むようだから、それで仕返しに、ぼくを化かしたんでしょう」

「ふうん」

水沢は納得できないようすで、返事をかえした。

「ただ、考えて、ぞっとするのは、本当に食っていたら、今頃なにをされていたかわからないってことですね。話をしただけでも、この有様なのだから……本当に、ぞっとしますよ」

木出は笑いながら、手の甲で汗をぬぐい、それから本のことへと話題を移し、半刻ほど喋っていたが、――水沢はそのほとんどを聞いていなかった。

木出が部屋を出たあと、水沢はかなり長い間ぼんやりと菘を呑みながら、物思いに耽っていたが、やがて、部屋のすみにおいてあった行李に近づき、なかから、おもむろに……猫の毛皮を取りだした。

三毛猫の毛皮。

水沢は、あの話の夜のうちに、すでに「ふく」を食っていた。

そして、それだけでは勿体ないと、皮をうまく剥ぎ、三味線屋にでも売ろうと、行李のうちに、今までしまっておいた。

老猫一匹の食いでを惜しんだ水沢は、木出をうまく出し抜いたのだが、どうにも寝覚めの悪いことになった。

手にした毛皮は重く、水沢は物憂げに眺めた。

ため息をひとつつき、訊ねるような口調で、ひとり呟いた。

「化けて出る相手を間違えてるじゃないか……食ったのは、私なんだよ？ それとも、彼のほうが化けられるだけのことをしたっていうのかい？」

水沢の言葉は、虚しく宙に響いただけだった。が、その刹那、手にしていた毛皮が身震いし、水沢のもとから飛びのいた。

そして、

「にゃあ」

とだけ応えると、首のない毛皮は、ととととと、と四肢で歩き、部屋から出て行った。

水沢はしばらく、その光景に肝をつぶしていたが、しかし、到底、自分が恨まれているようには、思えなかった。

## 猫談

<http://p.booklog.jp/book/46005>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46005>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46005>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.